

夫木和歌抄

卷八

夏部二

鵜河

百首歌中

俊頼朝臣

をちこちのよかはにたけるかがり火と
おもへばさわのほたるなりけり

師時卿家歌合、水辺螢火

読人不知

五月やみかがりなかけそたかせぶね
みぎはの螢ひかりしげしも

螢

健保三年名所百首御歌

順徳院御製

おほえ山しげみがもとにまじりても
人にしらるるほたるなりけり

健保三年名所百首御歌

僧正行意

ちへにもるしのだの森の下露に

あまるしずくやほたるなるらん

健保三年名所百首御歌

正三位知家卿

ゐなの行く風にほたるやみだるらん

こぼれてきえぬ玉ざさの露

健保三年名所百首御歌

正三位知家卿

秋風をみずのみまきのまこも草

かりにもつげで行くほたるかな

健保三年名所百首御歌

従三位行能卿

かはづなくいかほのぬまにすむ蛭

もゆるおもひにねをぞあらそふ

千五百番歌合、夏御歌

後京極摂政

まぐず原たままく数やまさるらん

はにおく露に蛭とぶなり

御集、蛭

後京極摂政

ねにたててつげぬばかりぞほたるこそ

秋はちかしと色にみせけれ

薬王品

寂連法師

夏むしの身をともしけるひかりこそ

やみにまよはぬしるべなりけれ

家集

西行上人

さは水にほたるのかげのかずぞそふ

わがたましひや行きてぐすらん

家集

西行上人

おぼえぬをたがたましひのきたるらん

おもへばのきにほたるとびかふ

文治六年五社百首、蛩

皇太后宮大夫俊成卿

ともしけつひかりを見るはあはれなり

あれにしみちのほたるなれども

正治二年百首

式子内親王

水くらき岩間にまがふ夏むしの

ともしてちてもよをあかすかな

千五百番歌合

大納言通具卿

ともしけちさはのほたるはほの見えて

くもるもしらぬとりの一一いふ

千五百番歌合

二条院讃岐

夏むしのともしすてける光さへ

のこりてあくるしのめのそら

千五百番歌合

西園寺入道前太政大臣

玉にまがふよはのほたるの影むれて

雲井のかりのこゑをまちけり

千五百番歌合

寂連法師

いにしへののりのかがみあと

たえてとぶひはよはの螢なりけり

承久二年四季百首

従二位家隆卿

むかし思ふとぶひや蛍春日野の

野もりやいかに夕やみの空

百首歌、蛍

前中納言定家卿

やみといへばまづもえまさる蛍もや

月になぐさむ思ひなるらん

御集、蛍

御京極摂政

窓わたる宵の蛍もかげきえぬ

軒ばにしろき月のはじめに

千五百番歌合

後鳥羽院宮内卿

軒しろき月の光に山かげの

やみをしたひて行く蛍かな

百首御歌

土御門院御製

村雨の雲間の蛍数見えて

風吹きすさむ庭の夏草

百首御歌

中務卿みこ

水くらきあし間の池の夕暮に

よをしる虫のかげぞほのめく

六十五韻字歌、夢覺愁人枕上知 前中納言家卿

かり枕まだふしなれぬあしの葉に
のぼる蛍ぞくるるよはしる

永久四年百首、夏虫

源兼昌

草村にすむ夏むしはこそこの秋くちし
したばのなかにや有るらん

喜多院入道二品親王五十首

前大納言兼宗卿

五月雨はまやのかやぶき軒くちて
あつめぬ窓も蛍とびかふ

堀川院御時百首

前中納言匡房卿

五月雨に草のいほりはくつれども

蛍となるぞうれしかりける

正治二年百首

小侍従

五月雨の庭のよもぎやくちぬらん

すぐる蛍の数そひにけり

正治二年百首

従二位家隆卿

つつみけんむかしやしのがぶ橘の

にほふま袖にくるほたるかな

正治二年百首

喜多院入道二品のみこ

あけ行けばもゆるほたるも影きえて

けぶりを水にのこすなりけり

柿本影供百首

後九条内大臣

草分けてもゆるほたるやいはたきの

浪のうはての夏のさわらび

宝治二年百首、水辺ほたる

後九条内大臣

きよぎせに螢ゆふる玉ざさの

葉わけの水の色ぞすすしき

名所歌中、興つ蛭

参議為相卿

岩こゆるおきつの浪に影うきて

あらいそづたひ行くほたるかな

建長八年百首歌合

右近中将家卿

船とめぬみなとのあしのたえ間より

ともすかがりやよはの夏むし

建長八年百首歌合

上御門院小宰相

身にあまる思ひを人に見せんとして

そでしのうらに飛ぶほたるかな

建長八年百首歌合

藤原伊？朝臣

けぶりたつ富士のすそのに飛ぶ蜩

もゆるおもひを身にやしるらん

建仁歌合

藤原景頼

にほてるやいりえのあしの葉にふれて

蜩みだるるしがのうら風

景勝四天王院名所御障子

後久我太政大臣

もしほやくあしやのあまのうきねだに

浪にしほれてゆく蜩かな

家集

鴨長明

あしの葉にまがふ螢のほのぼのと

たどりぞわたるまものつぎはし

建仁二年歌合

慈鎮和尚

ほたるとぶしがのおほわだ波ふけて

あまなき空にあまのいさり火

夏歌中、新深窓

大江広言

もがみ河すだく螢はいなぶねの

のぼればくだるかがりなりけり

家集

正三位知家卿

きよたきのせぜのしらいとおのづから

玉ぬきとめずちる蛩かな

家集、杜夕といふ事を

従二位家隆卿

雨ふれどくるればもゆる夏虫の

たれゆゑつつむころもでの森

光台院入道二品親王家五十首

従二位家隆卿

伊勢のうみの入江の草のしほひがた

あまのほたるの玉はひろはじ

承久二年四季百首

従二位家隆卿

たが袖につつむほたるのころもがは
おもひあまりて玉とうくらん

家集

従二位家隆卿

里人もいまはみくさをうちはらひ
ほたるばかりや玉の井の水

家集

清輔朝臣

はま風になびくのしまのさゆりばに
こぼれぬ露はほたるなりけり

題不知、現存六

信実朝臣

ひろふてふたまにもがもなひさぎおふる
きよきはらにほたるとぶなり

永仁二年内裏五首、水辺夏夜

参議為相卿

みだれゆくほたるのかげやたきがはの
水くらきよの玉をなすらん

乾元元年仙洞歌合、夏夕

参議為相卿

みだれゆく螢のけしきなさけみえて
月におとらぬ夏の夕やみ

後九条内大臣家百首、島蛸

隆佑朝臣

しまひびくいらづがさきの浪間にも

こたへぬ玉はほたるなりけり

十禅師社百首、樹下蛸

隆佑朝臣

おとは河かはぞひやなぎふく風に

かたえ秋なる夏むしのかげ

喜多院入道二品親王家五十首

隆信朝臣

おとは河せぜのいはなみ玉ちりて

もゆるほたるもかげぞすすしき

住吉社百首御歌

慈鎮和尚

住のえのよるのほたるのあはれさを
なおほもはする松風のこゑ

文応元年七社百首

民部卿為家卿

すみのえの玉もひとつにうつりつつ
浪のそこにもとぶほたるかな

文応元年七社百首

民部卿為家卿

水河のいはまの浪にとぶほたる
くだくる玉のきえぬとぞみる

河辺見螢といふ事を

民部卿為家卿

むもれ木の心もしらず名とり河

さもあらはれてとぶ螢かな

千首歌

民部卿為家卿

くるる夜はうきてほたるのおもひがは

うたかたたれにきえほかぬらん

文応元年毎日一首中

民部卿為家卿

をぐら山タやみかこつあめのよの

まどとふ物はほたるなりけり

結縁経百首

少将内侍

あさか山あさきながらも山の井の

かげ見る水に行くほたるかな

長久二年五月佑子内親王家名所歌合

読人不知

名とり河そこさへぞてる夏の夜は

ほたるひまなくみえわたりつつ

染河蛭

大納言経信卿

いさり火の浪まわくるとみゆれども

そめかはわたるほたるなりけり

行路蛩

大納言経信卿

行きくれぬほたるすだかぬ夜半ならば
まよひやせましふるの中道

古寺蛩

大納言経信卿

いまぞしる雲の林のほしはらや
そらにみだるるほたるなりけり

河蛩を、雲葉

法印実伊

ほたるとぶきしのこかげやあまのがは
ほしのはやしの名にはたつらん

旅螢

俊頼朝臣

あらし山ほたるをかげのしるべにて

たどるはたにのこずゑなりけり

仁和寺殿にて人人作文せられける次に、水上螢源仲正

よるひかる玉をながすとみえつるは

河くだり行くほたるなりけり

「国歌大観」より